

■第3部門(自然科学)

『言語の脳科学』

脳はどのようにことばを生みだすか

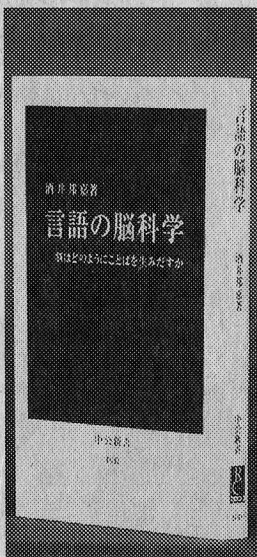
酒井邦嘉著 中央公論新社

生誕途上の科学を
生き生きと伝える

言葉は人間と動物を根本
から区別する。言語研究は
人間の本質の研究である。

古来、哲学や言語学などが
人間の本質を研究してきた
が、ついに新しい時代を迎
えることになった。それが
言語のサイエンスであると
本書はいう。人類は個別の
民族言語の個別の文法をこ
える人類共通の文法形成能
力をもっているというチヨ
ムスキーの提案を出発点に
しつつ、普遍文法の生得性
にサイエンスのメスをいれ

るとき、言語研究は脳科学
と結合する。人間の脳が普
遍文法形成能力をもってい
るとしたら、その説明は伝



酒井邦嘉さん

さかい・くによし 東京

大学大学院総合文化研究科

統的な言語学ではなく、脳
科学が担当する。著者は人
間の文法を自然法則とみな
して、言語学と脳科学の統
合によって、言語のサイエ
ンスを創造できるといふ。
それはいま生誕途上の科学
であり、本書はその発現場
場を生き生きと伝える好著
である。(今村仁司)

助教授。言語脳科学専攻。
1964年、東京生まれ。
東京大学大学院理学系研究
科博士課程修了。MIT言
語・哲学科訪問研究員など
を経て現職。著書に『心
いどむ認知脳科学——記憶
と意識の統一論』。